

石井紫郎氏の講演

【石 井】 石井でございます。途中から参りまして、申しわけありません。きのう実はある種のやはりフォーラムというのか研究会みたいなものを、世話人をやっているのがございまして、きのうの晩のうちに来ることができなかつたものですから。

私は3枚のメモ書き風のレジュメと、それから拙文のコピーを用意して参りましたので、これをごらんいただきながらお話ししたいと思います。今、日高先生のお話を伺っていて、進歩と進化をめぐって論ずるなどという事を、文科系の人間がやろうと考えたのが決定的に間違いじゃなかろうかなとは思っているのですが、私、実は「進化」という言葉をどちらかという社会システムに関連して使いたいと思って、いろいろ考えてきたいきさつがございまして、そちらの方の問題をやって、遺伝子がどうかみたいな質問をされると立ち往生するかもわかりませんので、あらかじめ防御線を張っておきたいと思います。

これに、副題に「概念史の観点から」というものを立てましたが、「概念史」というのは、あまり日本ではなじみのない言葉かもしれませんが、1950年代ぐらいから、当時の西ドイツでございまして、歴史学上、強調されてきた方法論ないしジャンルでありまして、歴史上の概念ですね。つまり同じ「自由」なら「自由」、「フライハイト」、英語では「フリーダム」というような言葉がですね、現在我々が使っている意味と中世において同じ意味であったかどうかということは、決して単純な問題ではないわけでありまして、結論から申しますと、中世の人間はどういう意味でフリーダムとかフライハイトという言葉を使っていたのかというようなことをきっちり押さえないと、資料の読み間違いが起きてしまうわけでありませぬ。

有名な話がございまして、19世紀のドイツに大変立派な歴史家が輩出したわけでありませぬけれども、その時代に史料集の刊行、史料に即して実証主義的にやらなきゃならないということで、さまざまな文書とか国王の証書であるとか、そういった基本的な史料の刊行ですね。史料集を校訂して発行するという仕事が盛んに行われました。そのうちの代表的なものは、『モニュメンタ・ゲルマニア・ヒストリア（ドイツの歴史のモニュメントの意味、M G Hと略称される。）』という題で、一連の史料集が作られた。日本でそれをモデルとしたのが史料編纂所がつくっています『大日本古文書』というシリーズでございませぬ。

1930年代に有名な実話がございまして、50年代にこの概念史の旗頭の一人になる学者、当時若かつたわけですが、中世の初期、8～9世紀ぐらいの史料である古文書の中に、

自由人を寄進するという内容の寄進文書がいくつも実はあるわけでありますが、例えば国王が修道院に対して、これこれどこそこの村の、あるいはどこそこの荘園の自由人を、つまり不自由人でない、奴隷でない自由人を寄進しますという寄進状をたくさん発行している。それが残っている。ところが19世紀のMGHの編纂者たちは、これを偽文書だと断定いたしまして、この史料集の中に収載しなかったのであります。それはなぜかと言いますと、自由人が寄進される、あるいは自由人を寄進する。寄進するというのは物と同じ扱いをするわけですから、つまり譲渡の対象、譲与の対象にするわけですから、自由人を物と同じようにやり取りするようなことは、およそあり得ない。だから、これは偽文書である。したがって、この史料集には採録しない、こういうふうな論理で処理したわけでありますが、その今申しました1930年代の少壮学者は、それはおかしいんじゃないか。文書というのは、何のために書くかといったら、1つは譲渡したという事実を書く。それをもらった人は、このものは自分のものですよという権利の証拠になるわけでありまして。場合によると、嘘の事実を書いた文書を確認につくるかもしれない。なぜかという、これは自分のものであるということとを裁判で、要するに嘘でもあれ、とにかく自分の主張を根拠づけるために、偽の文書をつくることはあり得る。しかし、その学者に言わせればですね、その自由人寄進文書というのは偽物かもしれない。けれども、それは「自由人を寄進する」という行為自身が、当時存在しなかったということの意味するわけではないだろう。逆にそれは、いくらでもあり得る事実だからこそ、そういう偽文書をつくる意味があるわけではないか。絶対にあり得ないことを、コンテンツとする偽文書というのは、つくる意味がないわけでありまして。ということで、一発で歴史がひっくり返ったわけです。つまり中世の自由人というのは、近代人が考える自由人ではない。自由な人間ではない。つまり農奴のような存在も自由人と呼ばれた場合がある。少なくともそういう例があるということははっきり、事実としてあったということ認めないと中世史は語れないのだという、一種の歴史学の革命といいますか、パラダイムの変換が起きたわけでありまして。そこから、やっぱり概念史というのは大事だねということになりました。

私も1960年代の初めぐらいから、法の歴史というものをやり始めた人間といたしまして、この概念史というのは、私にとって非常に縁の深いといいますが、欠くべからざる一つのメソッドになってきたわけでございます。そういう意味で「進歩主義の後継ぎは何か」というお題を廣田先生からいただきましたときに、とりあえず私にできることは概念史的なアプローチしかないというふうに思った次第であります。廣田先生に、進歩主義というの

は英語で何て言うんですかと伺ったらですね、大体「プロGRESS」という言葉がそうかもしれない。しかし、いろいろありますねというお答えをいただきましたので、レジユメのIに書きましたように、一応進歩というのは普通 progress のことを考える。進歩主義という progressionism と言うらしい。ただ、それに似た言葉として、例えば development、ドイツ語で Entwicklung。それから、まさに今問題になりましたような evolution ですね、進化という言葉がございますので、この3つをですね、少し調べてみようというふうに思いまして、便宜、evolution の方から、ここに並べておきました。これは大体『オックスフォード・イングリッシュ・ディクショナリー (OED)』のそれぞれの項目を見ましてですね、そのとおりに書いてあるわけではございません。あれは大体語義の古い順からずっと並んでおりますから、大体それをずっと順を追いながら書いておりますが、2つ、3つを1グループにまとめて見た場合もございますし、ある意味で簡単に縮めてしまった場合もありますので、OEDそのままであるということではございません。疑問がございましたら、完全なコピーを持ってきておりますので、ごらんいただければと思います。

IIに参ります。evolution という言葉は、要するに丸めたものですね、例えばこういう紙をこう丸めてあるのを広げるのが恐らくこの言葉の一番古い意味であろうと思われます。羊皮紙ですから、西洋においては文書を大体こういうふうにもるめて、それをリボンで巻いて持って歩く、あるいは保存しておくというのが普通でございます。あるいは封筒、袋から何かを出す。これも evolution という。そういう意味で使われていたようであります。

それから、だんだんですね、develop あるいは work out していくプロセスであるとかですね、何か潜在的に含まれている、あるいは何かのアイディアの中に含まれているものを展開していくというような、デザインとか、議論を develop させるというようなことで、大体において develop という言葉と evolve という言葉は、ほぼパラレルに展開してきたらしいということがわかる。そしてやはり注目すべき転換点というのが、このII-3のところ、1670年以降という新しい、比較的新しい、要するに近世の、後で申しますが、数のコードで物事を考えるということ人類が組織的・体系的に始めた時代の始まりと、ほぼ一致するわけであります。何か原初的なといいますか、種になるようなものですね、develop して、マチュアな、あるいはより完全な状態に変化していく。そのプロセスのことを evolution という言葉で表現するようになった。これが後の進化という意味で evolution が使われるきっかけになったのであろうと思います。極めてダーウィンの進化論に近いようなものを探すとすれば、その4番目に書きました1762年のシャルル・ボネという学者の説の部分であり

まして、進化論を非常に広くとった場合に、この辺が一つのターニングポイントだと、しばしば言われるようですが、後に出来上がるものというのは、全部あらかじめエンブリオの中に含まれている。エンブリオが、すべての将来成長する、すべてのパーツをですね、既にその中に全部持っていて、それが展開していく、developしていくというのがボネの考え方だったようではありますが、いずれにせよ後でもう少しくわしくお話いたします。

進化論については、また後ほどまとめて申し上げるとしまして、ようやく1859年にチャールズ・ダーウィンの進化論。そして、これが直ちに社会科学に火をつけまして、展開されまして、社会における、さまざまな社会的な現象について、あるいは人間の社会というものについて evolution が語られるようになってくるわけであります。

Ⅲの development はまさに先ほど言いましたように、それと絡んでいまして、envelope の逆でありますから、封筒から出す、要するに展げる。数学なんかでも式の展開なんて言いますが、括弧があるものを展げるというようなところからきているようであります。

1794年ですね、18世紀の終わりになりますと、非常にはっきり、進化論の歴史に非常に重要なものとしてプロットされるような evolution from a latent or elementary condition。これは94年以後に使われて、同じことから、やっぱりエンブリオの中にあるものが成長、ないし unfold していくという、そういう意味で使われるようになった。そして、doctrine of evolution、それは同時にまた development theory とも呼ばれるというようなことが言われているわけであります。

これに対してⅣの progress というのは、そもそも語源が違いまして、要するに前へ進むというような意味がもともとあったわけでありまして、Ⅳの1に書いてありますように、旅行をするというような意味ですね。まさに物理的に何かが動いて、前へ進んでいくという意味をこの言葉は持っていたようであります。

Ⅳの3あたりから、そろそろ進歩主義に近づいたような意味が持たれるようになってきたようでありまして、要するに rest とか、regress の反対語としてですね、「後ろ向き」とか「とどまる」というのじゃなくて、前へ前へと行くという、そういう意味合いであります。

そして、Ⅳ-4にあるように、1603年以降、このように successively、あるいはよい意味において、というような含意を込めて、前へ進むというふうな言葉として、progress はそういうふうに使われるようになったようであります。

レジュメの2ページ目にまいりまして、Ⅴのところについては、もう言うまでもないと思います。要するに、ここでキリスト教の場合には神様が創造したということですから、進化

という考え方にはなじまないということは明らかであります。

そこでVIに行きまして、いずれにいたしましても近世において進化論が復活への歩みが見えてきた、その時代的な背景を見てみますと、先ほど申しましたように数学ですね。数のコードでいろいろ物事を考え、あるいは原理を考えという時代が始まったということが非常に大きいように思います。デカルト、ニュートンですね。ニュートンの力学が書かれた本は文字どおり『自然哲学の数学的諸原理』という題を持っていることは周知の通りであります。

それからさらにそれを1世紀内の間にですね、地質学とか古生物学がどうも発達したようでありまして、化石というものがいろいろ分析の対象になりまして、どうやらこれは今存在しない生物が昔あったということが、あるいはノアの大洪水みたいなもので地球が一変したというようなこととはおよそ違って、地層というものがずっと累積的につくられているということが地質学的な知見からわかってきた。どうやら地球とか生き物には歴史があるらしいという認識が確立してまいりまして、しかもそれを年代、あるいは年数にまで立ち入って算えるということが行われ、そして化石の系列というのはやっぱり一種の進歩・発展といえますか、進化があったということのあかしであるというような理解が次第に成立していったようであります。これに、さらに発生学が結びつきまして、大分その進化論的な考え方が成立してきたようでありました。

ここに、Maupertuis、フルネームは Pierre Louis Moreau de Maupertuis と、長ったらしいので、ファミリーネームだけ書いてきましたが、要するに個体が発生するとき、まさに突然変異ですね、変異が起きる、それがあつたということを言った人がこのモーペルテュイだそうでありまして、規範から逸脱をするという言い方をしたようであります。ダーウィンの先駆者としては最上位にランクされるべきだと評価する人もいますが、そこまではねという人もいるようであります。いずれにしても重要であることは確かです。

そして、先ほど出ましたシャルル・ボネという人は、evolution という言葉を生物学の著作において初めて使った。先ほどのII-4で挙げましたものであります。ただ、これはダーウィンの、あるいはのちの evolution のセオリーとは大分違うわけでありまして、いわゆる入れ子説と言われるものだそうであつて、自分自身とその子孫となるべきすべての個体が、エンブリオの中に全部入れ込まれている、何代にもわたつて。ですから卵の中に卵が入つて、その卵の中にまた卵が入つて。それで、それがワンジェネレーションずつ、要するに剥けていく、展開していく。ですから、この場合は、evolution は進化論というよりも展開論、すべてが既に用意されていて、それが次々に展げられるという考え方でありました。

ところが、18世紀の後半から、ここに evolution について前進主義的な発想が登場してきたというようなことが、VIIに書いておきました『西洋思想大辞典』という、これはもともと英語で書かれた大きな辞書、“Dictionary of the History of Ideas”の翻訳版に書かれています。そこでは、progressionism は前進主義という日本語に訳されています。これはですね、もともとキリスト教の世界観が牢固として支配していた時代から、ある意味、当然のことですけれども、宇宙には階層構造がきちんとある。最小限の生が、今で言えば微生物ということでしょうが、それから最も完全なるものに向かって、つまり人間ですが、それに向かっての連鎖が存在する。だけど、これはすべて神が創造したものですから、次から次へ、次のものが出てくる、ということではないわけでありまして、すべて神様がそういうふうに向方して創造物としてですね、どんどんお作りになられ、鎖の中の一番高いものを最後に作られたんだというわけですが、でもライプニッツによって、それが時間的連鎖へと解釈換えされたというようなことが、さっき言いました『世界思想大辞典』の進化論の項目の中に書いてございましたので、私よくわかりませんが、とりあえず御紹介する意味で書いておきました。

つまり、階層構造が時間的な連鎖の中で形成されてきた、こういう考え方です。ここには比較解剖学によってもたらされた、脊椎動物がみんな基本的には同じような構造をして、しかしその種によっていろいろ違う、そういう知見が影響を与えているようでもあります。ただ、これもキリスト教的な発想がまだまだ強い時期でございますので、この過程そのものも、神があらかじめプログラムしたものだ。つまり創造というのは、1週間のうちにできたというのではなくて、何千年だかよくわかりませんが、大体何千年ぐらいのように考えられていたようですが、連続的に、時間とともに創造が行われてきた。つまり神は宇宙の歴史の中に、自己の本性を次第に顕然化させ、そして、ついに神性を最も完全に示すものとしての人間が最後に出てくる。こういうことでもあります。

ここにですね、さらにこういった意味での前進主義と transformalism、つまり種がだんだん transform されていくという考え方が結合してくるわけでもあります。しかし、それ自体も神のプランと見なされている。これは、つまり神はそのプランが transformation によって具現化されるべく宇宙を創造したというような考え方がここに書かれています。これはチャールス・ダーウィンのおじいさん、Erasmus Darwin。そういったような学者によって唱えられたというわけでもあります。

ところが、こういう前進主義に対して、また一方では反対する考え方も非常に根強いとい

いますか、強硬に主張されていたようでありまして、Ⅷに書いてありますカール・フォン・ベアとかジャン・ルイ・アガシというような学者は、これに対して非常に激しい批判を繰り広げたようではありますが、ここで注目すべきことは、前進主義だけではなくて、進化論そのものにも矢を向けたといえますか、つまり、反進化論と反前進主義との混同ないし混交が起きる。それは裏を返せば、進化と進歩を同一視するということにつながるわけでありまして。論理的には、この2つは同じではない。前進主義を否定することは進化論を否定することとは限らないはずではありますが、この反前進主義に対する批判の中で、どうもこの2つが混同されている、これが後の時代の物の考え方に、ある意味で因らずもというんでしょうか、影を落とすことになったんじゃないかなというふうに私は整理してみました。

その後、御存じチャールズ・ダーウィンの進化論が出てきたわけでありまして、これは私の勝手な解釈でございますが、このダーウィンの進化論というのは、後づけの、あるいはリトロスペクティブなもの、要するに説明の理論ではないか。つまり、決してその進歩というものを予測とか期待しているわけではない。何か変異が起きた。それによってどうなるか。前進するとも後退するとも、滅亡するとも、何ともわからない。その偶然の結果出てきたものが環境に適應するのかどうかによって、その結果が違ってくるわけでありまして。Ⅸの最後のところに、私の拙い文章を、これは宮川公男先生が頑張ってやっておられる『学際』(No.14)という小冊子に最近書かせていただいたものでございますが、お配りしたコピーの右側の3ページのちょうど2つ目のパラグラフです。たまたま現在日本学術振興会で一緒に仕事をさせていただいております本庶佑先生が書かれたものを読む機会がございまして、この中で非常に私がおもしろいと思ったのは、動物、生物が視覚を取得する、あるいはそれが進化していく過程を見てみると、それは行き当たりばったりにいろいろな生物種でいろいろなタンパク質が使われている。人間の視覚に関するタンパク質というのは、視覚が存在するほかの生き物のタンパク質を調べてみると、同じではない。手近にある、とにかく恐らく与えられた環境の中で生存を図った生体が手近にあるタンパク質を活用して、いろいろな能力を獲得していったが、その中には視覚を獲得し、これを進化させていったものもいた。そういう過程ではないかというふうに、これは私が勝手にこう解釈して、本庶先生の文章をちょっと使わせていただいたわけでありまして、そういうことは最初に申し上げましたように、私は実は進化というような言葉を主として社会科学上で社会システムについて考えるときに、一つの有益な思考方法ではないだろうかと考えて関心を持っているからであります。

Ⅸの下の方に私の専門の法の歴史に適用したらどうなるかということで、一つ例を挙げてみました。それは、ここに書いてございます検非違使という官職についてのことがらであります。組織の場合には検非違使の庁、官庁の庁の字を使います。この検非違使というのは、しばしば「令外の官」の代表的な存在として挙げられるものであります。「令外」というのは、律令制の令ですね。令の中に規定していない、つまり令の外の、例えば関白なんていうのもそうなんですが、そういう令に規定していないものが後からつくられたという、その代表的な存在であります。これを、どうやってつくったかと申しますと、検非違使の長官を検非違使の別当といいます。それはほかの官職にある人を別にそこに当てるといって、兼職させるという意味であります。別当というのはそういう意味でございます。近衛府の中將とか大将というのを検非違使の長官に当てるといって行われた。律令制の官庁の管理組織というのはですね、4等官からなっております。長官はカミです。国で言えば「守」という字を書きます。どういう漢字を当てるかは官職によって違いますが、訓み方はみんな一緒に、カミ・スケ・ジョウ・サカンの4等官から成り立っているんですね。国の場合ですと、国のカミは「国守」と書きます。それからスケは「介」、吉良上野介の「介」はこれですよね。それからジョウは掾、サカンは目です。これがですね、軍事的な組織の場合には、カミは將軍の「将」です。それからスケが「佐」です。それから、ジョウは「尉」、サカンは「曹」が普通です。近代日本の軍隊の階級は、これを全部踏襲しているわけでありまして、この検非違使のカミには、ほかから兼任で来る。近衛府にはもちろんカミ（将）がおりますから、これを検非違使の長官であるカミとして別当にする。義経は、検非違使のジョウの位をもらうわけですね、後白河法皇から。この検非違使のジョウは「尉」が本式ですが、「判官」ともいう。この「判官」は一般に「はながん」と訓むのですが、不思議なことに検非違使だけは「ほうがん」と訓んでおりまして、したがって「ほうがんびいき」とか「九郎ほうがん」などというように、義経については「ほうがん」と呼ぶのはここから来ているのです。

中国の都市というのは、立派な城壁を持っております。長安とか北京とか、御存知の通りです。ですから、夜になると、城門を閉めてしまいますから、盗賊も何もそこには攻め込んで来ないわけでありまして、したがって都を守るための軍事組織、警察組織というのは、ほとんど要らない。必要なのは、宮殿を守ること。この兵衛というのは、そういう存在です。それを中国から日本はまねをして入れる。

ところが、日本の京都というのは城壁がないんですね。奈良もそう。それで、平安遷都してから30年ぐらいすると、京のまちもなかなか物騒でしようがない。盗賊がやって来て、

火つけをする。門荒らしをする。というようなことで、しょうがないので、この検非違使というのをつくった。ただ、増員するわけにはいきませんから、御所を守る連中に、おまえたちやれ。こういうことで張りつけた。ところがですね、非常におもしろいことに、この検非違使は今までの律令制の裁判とか検察制度を全く変えてしまう実務を始めるわけでありまして。律令制の刑事裁判というのは、非常に厳格なように見えますが、実は訴えた人間が無実の者を告発した、あるいは捕まえたということに対して、ものすごく厳しい態度をとっているのです。例えば、Aという人間がBという人間を告発する。これはAが私人の場合であれ、役人の場合であれ、同じなのですが、これが正しく、Bが本当の犯人であれば、いいんですが、これが無実である、あるいはおれは潔白だと言ってBが、あくまでも頑張っちゃったらどうなるかという、おまえ、うそを言ったんじゃないかって、Aが今度は誣告の嫌疑を受けるわけです。両方とも譲らないときには、まず最初にBが拷問される。Bが拷問して落ちればいいんですが、Bが絶対やっていないとがんばって拷問にも耐えちゃうと、今度はAが拷問されます。「反拷」というテクニカルタームがある。BにやっただめだからAにという、つまりAというのは、いつも要するにうそ言ったという潜在的な嫌疑を受けているわけでありまして。なぜそうなっているかという、無実の罪のやつを捕まえてきて変なことをしたら、国家に傷がつきますよね。この制度はそれを防ぐ意味をもっている。要するに、自分じゃ責任を負わない。国なり君主なりは。訴えた、あるいは捕まえてきたAが悪いんだというふうには、責任を人に転嫁する仕組みなのです。これだと本当の意味では治安の維持できませんよね。いつも、自分が逆に不利益をこうむるおそれがありますから、告発などしたがる。明々白々たる現行犯の場合であるとか、非常に限られた場合にしか、このシステムというのは動かないのでありますが、検非違使というのは、それを全部無視しちゃう。一方的に行って、とっ捕まえてきて、拷問して、それで無実かもしれないなと思っても牢屋に入れるというようなことをやり始めまして、つまり本当の意味での刑事裁判ですが、法学では糺問主義という概念を使いますが、つまり国家権力が自分の責任において捕まえてきて、裁判をして、自白させて、処刑するという、そういう仕組みが、実を言いますとこの検非違使ができて、そのこの実務において発達していくわけでありまして。中国の場合には、なかなかそれができない。日本では現在の交番システムとか、非常に犯罪を抑制するシステムがよくできている。世界的に、少なくとも今までそう言われてきた。私は、この検非違使が9世紀に、820年代ですが、できて、すぐにそういうシステムがちゃんとできたわけじゃないんですが、だんだん1世紀、1世紀半たつ間に、今言ったような、私に言わせれば進化が起きたわけでありまして。

そういう例を考えておきますと、進化という言葉は、それを「結果オーライ」、後付けの意味で用いる限り、この概念を歴史上、社会システムに当てはめるとするのは、一つの便利な方法ではないかなという実感を持っているのでございます。時間がないので、その後の民事裁判の所務沙汰の話は省略いたします。

いずれにいたしましても、Ⅸのところでお話ししましたように、進化論は本来後づけの理論なんです、これが社会に適用されたときに、例の、前から存在します前進主義といわばくつついたといいますが、前進主義、社会的な意味での前進主義、進歩主義のコンテキストの中に、そのダーウィンの進化論が受容されますと、本来ダーウィンが言ったこととは、およそ違う含意というのがつけ加えられることになってまいりまして、適者生存であるとか、あるいは人為的に淘汰すべきだとか、一番ひどいことはそういうことになるわけですが。要するにレイシズムとかですね、そういうものになっていったんじゃないかということでありまして、本来、ただ包んであったものが開かれていくという、evolutionという言葉がですね、だんだん種が発展するという意味に変わってきたんですが、さらにそれが社会に適用されることによって、もっとその度合いが強まって、ひどくなっていった。それが進歩主義の行き詰まりであり、その後継ぎをどうするかという、このフォーラムのテーマにもつながってきたんじゃないかなというふうを考えるわけであります。もともと、ですから evolution も progress も development も、そう大した違いはない言葉ですが、生物の進化という問題を手がかりというか、そこでもってずっとやってきたその言葉の変遷がですね、社会に持ち込まれて、進歩・発展の意味を強めて現在に至っているんじゃないか。私は、社会システムに進化概念を使うことは便利だと、先ほどから例を挙げて申しておりますが、それはあくまで後付けの議論としてであって、こうした進歩・発展主義とは一線を画しているつもりであります。

では、どうしたらいいのか。これはもう、答えがそう簡単に出るようなものでございせんけども、先ほどの話に戻りますけれども、人間はもともと一番最初は絵を描いたわけですね。アルタミラの洞窟に絵を。つまり二次元でした。それが、文字を発明することによって、つまり線ですね。線でもって。ただ、線も漢字の場合とアルファベットの場合を比べると、漢字の方が二次元的要素が少し残っていますから、うまく、そう簡単には整理できないんですが、大きな流れで言いますと、二次元から一次元に、そして17世紀に数のコードという0次元の記号でもって物事を考えるということになりますと、非常に物事を合理的に、かつ効率的に処理することができる、あるいは考えを押し進めることもできる。非常に効率のよ

いりテラシーができ上がってきたわけでありませう。

ちなみに、XIに「数字的技術」と書いてございます。これ、中国で「数字的技術」というのはデジタルテクノロジーのことだそうでありまして、日本語でデジタルなんていうより、よっぽど私はいい言葉だと思って感心しているんですけども。要するに、こうやって科学がどんどん発達してくると、それによって支えられた技術というのがものすごい勢いで発達するという、そういうこの300年ぐらいの歴史があったわけでありませう。ちなみに、日本における「科学技術」というのは、そういう意味で科学によって推進され、あるいは支えられている技術のことを言うのであって、「科学及び技術」ではない。サイエンス&テクノロジーと訳するのが普通なのですが、むしろサイエンス・ベイスド・テクノロジーと訳すべきだろうと思っているんですけど、いずれにしてもサイエンスとは違うものでありませう。たまたま、きのうの研究会でもおもしろい話をききました。岡崎の基礎生物学研究所の所長をやっているらっしゃる勝木さんがですね、自分はなぜ分子生物学を志すようになったか。大学の1年生のときに、それまで自分は天文学者になりたかった。ところがあるとき、一番新しい、いわゆる二重らせんのことの講演を聞いてですね、そうしたら、これは数学だと思った。それで自分は分子生物学に進んだ。それまで生物学なんて全然興味がなかったけれども、という言い方をしていらっしゃいました。まさに、現代の生命科学が、こういうまさに勝木さんをして数学だと言われるぐらいの、非常に抽象的な構造の組み合わせで物を考えるということになったということなんだろうと思っております。

私、結局これからどうしたらいいのかと言ったら、やっぱり文字コード、あるいは場合によると絵のコードの復権というものが、人間の社会の中で、あるいは文化の中で必要なのではないか。それを、私は仮にプロジェクションという言葉で表現しているわけでありませう。自分たちが今やっていること、あるいは将来どうなるかっていう予測を含めて、客観化して、プロジェクトしていく。このプロジェクションという行為というものをですね、なるべく、しばしば、あるいはいろいろな形で行うということが必要なんじゃないか。もしかするとさっき言いました、ダーウィンの本来の進化論の法則というのは、もしかすると人間、これ退化、あるいは滅亡するかもしれない、地球そのものも壊れるかもしれない。こういうような厳しい法則、これを含意にしているんだろうと思えますね。それを、その進歩主義的に、一方的に解釈すると、変なことになっちゃう。そうでなくて、ダーウィンの進化論の法則というんですか、法則というのは掟ですから、掟の前に敬虔にこうべを垂れながら、このプロジェクションということをやってみるということが必要なのかな、と。

最近、サステナビリティということが、さかんに言われるようになったのは、ある意味ではこのプロジェクションの一種なのかもしれない。ただ、最近また今度はサステイナブル・ディベロップメントなどといういいかげんな言葉が出てきまして、どうも悪いくせがまだ抜けていないなという感じがしないではない。しかもですね、やっぱり最後に申し上げたいんですが、この進歩主義の後継者がどういうものであれ、常に後発の人間や国・社会の進歩主義というのがあるわけですし、中国であるとか、アラブ諸国であるとか、いろいろあるわけですが、それに脅かされる。その結果、それに対抗するために、あるいはそれをやっつけようとするために、自分たちも前進しなきゃならない。こういう、アメリカのネオコンと言われるのもきっとそうなんじゃないかと思うんです。コンサーバティブといますが、あれは進歩主義の一形態かなと私は思っています。恐らく、そういう意味で進歩主義というのは、なくならんんじゃないかということで、どうやってそれをコントロールするのかということが大きな課題になるということにしておりますが。

大変どうも、まとまりのない話で申しわけございません。

【司 会】 ありがとうございます。どうぞ、御質問、感想でも。あるいは、ちょっと遅れていて休みの時間になっているんですけど、お茶飲みながらでよろしいでしょうか。それじゃ、ちょっと休憩をさせていただいて。半から始めましょうか。3時半から、佐和先生。

石井紫郎氏の資料

進歩と進化をめぐる

— 概念史の観点から —

2005年6月4日

石井紫郎

I 進歩とその類似概念

進歩：progress, Fortschritt 進歩主義：progressionism

発展：development, Entwicklung

進化：evolution, Evolution

II evolution の語義変遷 (cf. OED) ← evolutio

1. process of unrolling, opening out, or disengaging from an envelope.
2. process of developing/working out in detail, what is implicitly / potentially contained in an idea or principle; developing a design, argument, etc.
3. process of developing from a rudimentary to a mature or complete state.(1670 ~)
4. theory of evolution, that the embryo or germ is a development of a pre-existing form, which contains the rudiments of all parts of the future organism (Ch.Bonnet 1762)
5. Charles Darwin's theory of evolution (1859)
6. social evolution

III development の語義変遷 (cf. OED) develop × envelop(e)

1. a gradual unfolding, bringing into fuller view; fuller disclosure or working out of the details of anything, as a plan, a scheme, the plot of a novel.
2. evolution or bringing out from a latent or elementary condition.(1794 ~)
3. the growth and unfolding of what is in the germ.(1796 ~)
4. development theory = doctrine of evolution

IV progress の語義変遷 (cf. OED) ← progressus (× regressus) = going forward

1. action of stepping or marching forward or onward, travel(ing), journey(ing)

2. onward movement in space; course, way
3. going on, progression, forward movement in space (as opposed to rest or regress),
4. going to a further or higher stage (successively), growth, development, continuous increase (in good sense), advance to better conditions, continuous improvement (1603 ~)

V 古典古代的・キリスト教的反進化論

VI 近世における進化論の「復活」

デカルト『哲学の原理』(1644)

ニュートン『自然哲学の数学的原理』(1687)

18世紀の地質学、古生物学の発展 (特に地層、化石の発見)

→ 〈地球・生物に歴史がある〉という認識を基礎に年代・年数の計算

→ 化石の系列は進化の証という理解

発生学の寄与:

Maupertuis (1698-1759) 個体発生における〈規範〉からの逸脱の発見

(「ダーウィンの先駆者の最上位」?)

Charle Bonnet “evolution”という言葉を生物学の著作ではじめて使用 (cf. II - 4)

★ 但し 〈入れ子 (emboitement)〉説:

自分自身とその子孫となるべきすべての個体が収められている胚種から発生する過程 = “evolution” —— 〈展開論〉とでも呼ぶべきか!?

VII progressionism (「前進主義」)

『西洋思想大事典』(平凡社'90) ← "Dictionary of the History of Ideas" ed. by Ph.Wiener, '68 の「進化論」(Evolutionism): 〈18世紀後半から、進化 (evolution) についての新しいタイプの考え方 = 前進主義 (progressionism) 登場〉

宇宙の階層構造 (最小限の生あるもの ~ 最も完全なるものの「連鎖」):

Leibniz(1646 ~ 1716) により、時間的連鎖 (より高次の完全性に向けて、限りなく上昇する一本の直線的な過程) へと解釈換えされ、以後さまざまな形で唱えられる。

← 比較解剖学による脊椎動物の類似性の知見

この過程は神があらかじめ意図したもの（連続的創造）；（神は宇宙の歴史の中に、その本性を次第に顕然化させてゆき、ついに神性が最も完全に明示された存在が人間）

18・19世紀の交に、この意味での「前進主義」と transformalism が結合（しかし、これも神のプランとみなされた：神はそのプランが transformation によって具現化されるべく、宇宙を創造した！）－ Erasmus Darwin, Jean Lamarck

VIII 直線的前進論批判

「生物の多様性は単一の基本的原型からの漸次的完全化という直線的図式では説明できない」（Karl E.von Baer, Jean Louis R.Agassiz）

→ 進化論そのものへの批判に戦線拡大

→ 反進化論と反前進主義との混同・混交 = 進化と進歩の同一視

● cf. 論理的には、前進主義否定 ≠ 進化論否定

IX Ch. ダーウィンの進化論：後付けの（retrospective）理論（進歩を予測・期待しない） 退化も evolution に含意されているはず。

Cf. 視覚のタンパク質（『学際』No.14, Feb.2005 所収拙文）

偶然（変異）の結果が環境に適応するか否かは、予測不可能

法の歴史への適用： 検非違使〔糺問主義の進化〕

所務沙汰→雑訴（民事裁判の未成熟・退化）

X 社会的ダーウィニズム：進歩と進化の混同（意図的？）

IV-4の意味における progress を越えて

XI progress から projection へ

数のコード（0次元）による合理性・効率性追求一辺倒の progressionism

（ちなみに「数字的技術」）= digital technology）

→ 文字コード（1次元）、さらに絵のコード（2次元）の復権

ダーウィンの進化論の法則（掟）の前に頭を垂れて

"sustainability" は projection ？!

"sustainable development" はまだ progressionistic ？!

しかも、後継者が何者であれ、後発組の「進歩主義」に脅かされる。その結果、進歩主義へのやり戻し現象・運動が起きる（cf. “ネオコン”）。進歩主義はおそらくなくなるのではないか。どうやってコントロールするか、のみ。